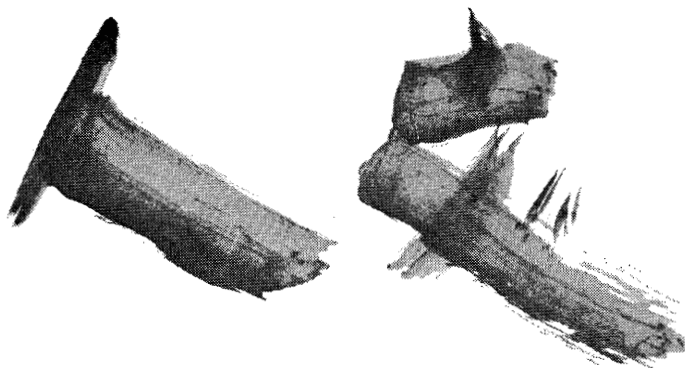




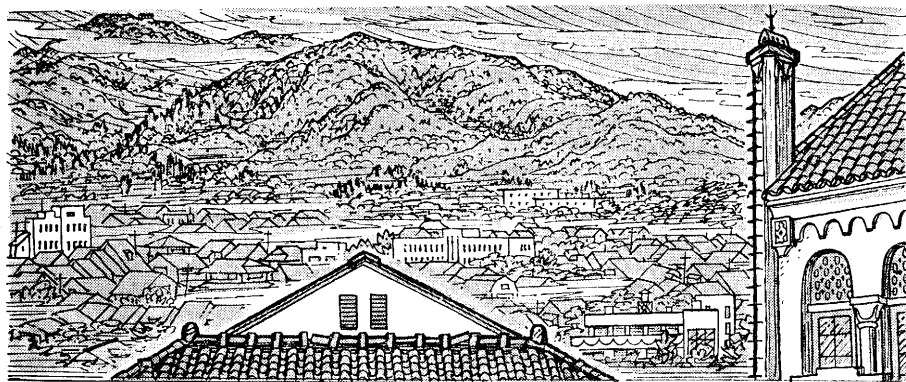
第二八号



1983

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第二八号

1982年12月——1983年 5 月

も く じ

随 想

「不」の一字

吉川 忠夫

リケ界隈

天野 史郎

八紘基柱

井上 章一

本のうわさ

宇佐美齊『立原道造』（矢淵）・山田慶児『三清梅園』（羽賀）

・桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』（山下）・飛鳥井雅道『日本ブ

ロレタリア文学史論』（井波）

共同研究の話題

府県統計と「政談演説」

（近代日本の政治運動班）

古屋 哲夫

金玉と木石（石刻資料の研究・整理班）

勝村 哲也

表街道の社会史をめざして

（一八四八年研究班）

浅田 彰

旅

ケンブリッジ大学からの便り（磯波護）・トルコ族の移住・現

代篇（浜田正美）・移動民のパン焼き技法（谷泰）

書いたもの一覧

計報・外国人研究員・招へい外国人学者（19）・東洋学文獻

センター講習会・おくりもの（20）・お客さま（21）・人のう

ごき（22）・西館について（23）

「不」の一字

吉川 忠 夫

「無」の一字ではない。「不」の一字である。「不」の一字の有無が後世を悩ませ、いまでも悩ませつつけているという話。罪作りの元凶は鄭玄しやうげん。後漢の大儒の鄭玄は、家督を息子にゆずる七十歳をむかえると、こしかたの自分の生きざまを自伝風に綴り、それを「戒子書」としてあたえた。「後漢書」鄭玄伝に収めるその文章の冒頭に、諸国遊学の旅に出るまでのいきさつがこう書かれている。「わが家はもともと貧乏で、父母や兄弟たちのゆるしも得られぬまま、下端役人の職をなげだし……」。原文は「吾家旧貧、不為父母群弟所容、去厮役之吏……」。この「不」の一字がさまざまの論議をよぶこととなったのである。鄭玄ほどの人物が、親兄弟のゆるしもなしに出郷するはずがない。これはきっと「後漢書」が筆写されてゆく間に、いつしか「不」の一字がまぎれこんだのにちがいない。

人びとはこのように考え、そしてこのことを証するまたとない材料を手にいれたのは清朝の阮元であった。陳舜臣氏の「阿片戦争」にもほんのすこしだけ登場する阮元は、やがて大官となり、学界の一巨頭ともなる人物だが、三十歳をすこしこえたばかりの一七九五年、山東学政であったとき、鄭玄の故郷の山東省商密県でその祠墓の修理を行ない、深く堆積した砂土のなかから一碑を発見したのである。唐代立石、金代重刻



の「後漢大司農鄭公之碑」。それに録された「戒子書」には「不」の一字がなかった。「古賢の心迹を昭雪すること浅からざるなり」と阮元は有頂天であった。一九八二年刊行の張舜徽氏の「中国文献学」にも、千古の疑案を解いた大事件として特筆されている。

だが本当にそうだろうか。私には、「不」の一字をかく唐碑がうさん臭く感ぜられてならない。唐代においては、古典注釈の大家鄭玄にたいして、「たとい孔子さまのまちがいは口にしても、鄭玄先生の悪口を聞くのはまっぴら」といわれたほど、いささか本末顛倒の評価さえあたえられていたことを思うからである。唐碑の撰文者には、阮元とおなじように、鄭玄ほどの人物が、という心理がはたらかなかったかどうか。ともかく、「不」の一字がないのをよしとする立場は、身のたけは八尺、酒量は一斛、一升酒、と「後漢書」が伝える太くてたくましい鄭玄像を瘦せ細ったものにしはしまいか、と恐れるのである。

リ ケ 界 隈

天 野 史 郎

十九区は昔からの労働者街である。住み分けがはっきりしているパリのこと、この地区に金持が住むなどということは決してありえない。フランス人は中産階級の中より下。黒人、アラブ人、ユダヤ人、そして最近とみに増えつつあるヴェトナム人系、カンボジア系の中国人の姿が多い。要するにパリの下町である。その十九区のリケ通りに住むように



なつて一年と半年余り。女房が毎日のように買物に出かけ、娘達も幼稚園に通いなれてくると、ようやくこの地区の住民として認知される。パン屋は焼け具合のいいパンを選つてわたしてくれるし、近くのペンツのガレージの前を通れば工員が何かとお世辞を言ってくれるらしく、女房は至つて御気嫌である。娘達も幼稚園で友達ができ、子供を通して親同士につき合いも始まつた。ただしそのつき合いの中で我々の特殊な地位にも気づくはめになる。

娘達の通う公立幼稚園はこの地区のこととて白人、黒人、アラブ人、東洋人と児童の肌の色は全てそろつてゐる。更に驚いたのは、校長の話によれば、百数十人の園児の国籍を数え上げると数十にもなるということだ。幼稚園も既に世界の立派な縮図となつてゐる。無論子供達はそんなことおかまいなしに誰彼となく遊んでいるのだが、ここに親が加わるとそうもいかなくなる。黒人、アラブ人の親が白人の親と声をかわすこととはいつて稀であるし、つき合うことはまず無い。中国系の親も程度は異なるがやはり同様。難民とはいえ中国華僑、ペンツ、BMWを乗り回す中国人もいるのにである。

一度はこういうことがあつた。幼稚園も年長組ともなると、誕生日に友達を家に呼んで小供同士のパーティーをする。我家でも同級の子供六、七人が来てにぎやかに遊んでいたが、黒人、アラブ人はゼロ。中に一人中国人の女の子がいた。元気のいい子で皆と仲良く遊んでいた。しかしそれぞれ子供を迎えに来た親同士はそうはいかない。それまで話しこんでいたフランス人の親も中国人の親が現れるとすぐさま退散。子供にせがまれ居残つた親も中国人と話すことを明らかに避けている。こうし



て我々の幼稚園を通じてのつき合いはフランス人に限られていく。望むと望まざるとにかかわらず一種の名誉白人として扱われている事実を知った後味は苦いものである。

八 絃 基 柱

井 上 章 一

昨年の秋、宮崎に八絃一字の記念碑を見にいった。そのときのことを書いてみたい。もっとも、碑そのものの話ではない。碑を見おわって、ホテルについてからのことである。

ホテルの入口で、えらく体格のよい背の高い人に会った。どうも顔に見おぼえがある。どこかでおめにかかったような気がする。が、その当座は、誰だか思いだせなかった。気がかりではあったが、そのままフロントまで足をはこんだ。

フロントからは、ロビーが見わたせる。そのロビーにも、見なれた顔の面々がいた。こんどは、はっきり名前もわかった。読売巨人軍の投手だったのである。リリーフ・エースの角がいた。江川の声も、はずんでいる。秋季キャンプを宮崎でやっていたのだろう。こうなれば、入口で出会った人も誰だかはっきりした。新浦だったのである。

私は、阪神ファンである。巨人はきらいである。しかし、不思議と敵愾心はおこらなかった。それどころではない。逆に、したしみすら感じた。正直に言おう。私は、江川のサインがほしいと願ったのである。江



川と握手がしたいと、心から念じたのである。

私は、がんらい、人間の交節には寛大なほうである。学生運動の闘士が就職にさいし政治的信念をすて、背広をきこむ。それも、しかたのないことだと思っている。しかし、私にも、ゆずれない一線はあった。会社の上司が巨人ファンなので、阪神をすて巨人にのりかえる。そういう転向だけはゆるせないと考えていたのである。

そんな私が、江川らの姿を見ただけで、このかわりようだ。私は、自分に腹が立った。今さらながらに気がついた自分の卑屈さに、あきれてしまった。

しかも、くやしいことに、フロントの係員に、つぎのように言われたのである。「サインや握手は御遠慮下さい」と。おそらく、ものほしそうな顔をして、ロビーをながめていたのだろう。サインをもらいたがっているように見えたのだろう。それで、係員に、先手をうたれ釘をさされたのにちがいない。無念さが倍化する思いではあった。

今、私は、ファシズムの空間演出についての原稿を書いている。とうぜん、八絃基柱についても言及するつもりである。しかし、八絃基柱のところは筆がおよぶたびに、あの時のくやしい思い出がよみがえる。この分では、とうてい原稿など書きあげられないかもしれない。書けたとしても、不出来なものになってしまうのではないかと危惧している。



本のうわさ

宇佐美齊『立原道造』

(B6版、二七三頁、筑摩書房)



本書は、二十五年に満たない詩人の生涯を追いつながら、「短歌から始めて、自由詩と物語の習作を経て、ソネットの完成へと到る、立原道造の短かい詩作生活の軌跡」を論じられたものである。短命なるがゆえに、ともすれば天才という美名のかげに隠蔽されてしまいがちな道造の詩人としての歩みが、作品の分析等を通じて解き明かされてゆく。それは単に詩の形式の変遷を明らかにするだけではない。著者の眼は、表現様式としての詩型の変化を欲する道造の詩精神の発達に向けられている。少年時代の習作から始め、日記、書簡、ノート、友人の証言、草稿と定稿の比較、先行する文学作品の影響、等々、豊富な資料を駆使した論証の手順は実に見事なものである。

宇佐美さんはかつて学生時代を回顧して、「観念を食べて生きているようなみずからの生活不在の生活を恥じ」云々と書いておられる(人文第二二二号)。それは本書に描かれた立原道造の姿と不思議に重なり合う。いわく、「道造は生活なき生活者として避暑地の高原を漂いながら、淡々しい経験を虚構化し、転置し、ときには本歌取りの技法をも援用して、作為と人工の極みを生きたのである」と。この詩人像はあたかも宇佐美さんの分身であるかのように思われる。さて、「実生活」で得られぬものを「想世界」に求めんとして、「積極的に物語世界の構築」に努め、そこに自らの生を漂わせるとき、「詩人・立原道造」が誕生するとされる著者は、道造の詩(ことば)を論

ずる場合、決して実生活をもって作品を解釈しようとはされない。詩人の愛を語る対象が誰であるのか、舞台はどこであるのかなどは問題にならないのだ。このような鑑賞の方法から適切な解釈が導き出されるのを見たとき、とかく作品の背後にある事実関係の解明に終始しがちな中国詩鑑賞の問題点が浮彫りになった気がして、反省すること頻りであった。もとより道造の愛の詩の背後に政治的な寓意を読みとろうとするものはないだろうが。

こんにち道造の詩は、愛を語る手紙に引用され、ときとして結婚式のスピーチにさえ登場する(私も目撃したことがある)。本書を読み進んで、「いわゆる『愛の詩人』として今も根強い人気を持つ立原道造は、実は『愛の不可能』をこそ繰り返したたった詩人である」という一文に接したとき、私は嘆息を禁じえなかった。しかしまた、死の床で「五月の風をゼリーにして持って来て下さい」と頼む道造の無邪気な明るさを愛する心さえあれば、とも思った。それは結局、私自身が「五月の風」の道造に惹かれる通俗的な読者であることの証明にはかならないのだけれども。(矢淵孝良)

山田慶児『三浦梅園』

(B6版、七四二頁、日本の名著20、中央公論社)

『日本の名著』シリーズの一冊である本書は、おそらく本シリーズの意図——簡易な形で広く日本の思想家を紹介するという意図からすれば、はなはだ異彩を放つものといわざるを得ないだろう。近世の独創的な思想家に興味をもつ読者が、もし書店でこの『三浦梅園』を手にすれば、その膨大な量と、三百頁にもぼる梅園論、しかもそれが「黒い言葉の空間」と題されていること、さらに収録・現代語訳された著作の少なさなどから、嘆息しながら書棚に戻し、となりに並んでいる安藤昌益か、あるいは山片蟠桃を選び、まずはこちらから思うに違いない。

「偉大な、独創的な、特異な思想家」と評される梅園について、われわれは他のどの思想家とくらべてみて、はるかに貧弱な知識しかもちあわせていないし、近世思想史のなかで彼の像を確かにすることは容易

ではない。梅園と同じような評価を与えられてきた安藤昌益は、著者の言葉をかりれば、「今日の思想的課題を担う」思想家として、現在その先見性が注目をあびている。全集の刊行、新たな資料の発見がはなはなしく報じられ、自然と人間、農業、環境などのさまざまな課題を解決しようとする人々に、確かな手がかりを提供している。しかし、著者によれば、梅園はそうしたことはしない。思想の内容ではなく、伝統的思想への批判的な姿勢と、自己の思想的課題を「おのれの言葉でそれを再構成」したことにこそ、梅園の現代的な位置をみとめてるのである。

「梅園の哲学、とりわけ『玄語』は、ほとんど絶望的とみえるまで難解である」。その難解さに十数年かけて取り組み、中国哲学、古代西洋哲学、近代科学に関する知識を縦横に駆使して、本書は梅園の本質に

せまろうとしている。中国思想の素養に欠け、「気の哲学」と聞いただけで身構えなければならぬ者にとって、「黒い言葉の空間」を読みこなすだけでも骨の折れることである。

かつて近世の思想史研究が、いかに中国哲学の無知、無理解のうえで行なわれていたかということが批判されたことがあった。本書が他の日本思想家の手になる梅園論とどのように交錯するか興味あるところである。また、日本近世の思想のみならず、近世史全体のなかで、中国をどのように考えるかについて、大庭脩氏の仕事のほか見るべきものがない。この点、本書は通りいっぺんの概説書とは違って、そうした問題を考察する重要な示唆をわれわれに与えてくれるように思われる。

梅園の思想的格闘——「そのような格闘がさまざまにかたちを変えて、いたるところで繰り上げられることなしに、日本の近代がありえなかったであろう」という、著者の強い確信の言葉を真摯に受けとめたいと思う。

(羽賀祥二)

桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』

(B6版、三四一頁、大蔵出版)

本書は二部に分かれ、その前半部は桑山氏「玄奘三蔵の形而下」、後半部は袴谷氏の「仏教史の中の玄奘」である。そして本書評の対象は前半部つまり桑山氏の部分(一一〜一五一頁)に限られる。

評者にとって玄奘は、西遊記の三蔵法師のモデルとしてよりは、般若波羅密多心經を始めとする大量の仏教經典、それに因明つまり仏教論理学のテキストの翻訳者としての方がより強く興味を引く存在である。玄奘を形而上学者と呼ぶことには異論があっても、玄奘を形而上学的文献のすぐれた翻訳者と呼ぶことには誰も異論がなからう。しかるに桑山氏のこの論文はわざわざ「形而下」と銘うったものである。玄奘という人を形而上と形而下に一刀両断し、前者は全面的に袴谷氏にゆだね、自分は「形而下」のみを分担するという大そうドライな戦術である。形而下は形而上に対する相

関語である。しかし桑山氏はその相関性は自らは意に介さず、形而上に関心をもつ者が勝手に自分の仕事を利用してくれればいいという姿勢である。

さて形而下といっても本書で著者の採られた方法は歴史学者の採るオースドックスな方法である。つまり玄奘なら玄奘という一個体の一生を通じての仕事、時間と場所という二つの軸に順を追ってつきつきと正確に定位させることである。そしてその総決算は普通、年譜と地図作成で完了する。しかし桑山氏のこの仕事にはそのどちらもが付されていない。そしてそのことの理由を著者は、玄奘の「生まれ年がわかっていない」、旅程の諸地点の比定において「まだはつきりしないところも多い」とされる。玄奘の伝記には日本語のものに限っても前嶋信次『玄奘三蔵』兼子秀利『玄奘三蔵』がある。これらに較べれば桑山氏の仕

事は格段の出来栄である。根本資料である慧立・彦惊の『三蔵法師伝』、冥詳の『法師行状』、道宣の『玄奘伝』の三書間の齟齬した記事をよく較べあわせ、先人の説と自らの創意とによってよく取捨に勉めておられるが、なおかつ先に述べたように自信ある年譜を作りかねておられる。

著者の以上のような格闘は、イエス伝の作成に捧げられたヨーロッパ学者の仕事を連想させる。すなわち四つの福音書の記述間にはやはり齟齬があり矛盾が存する。そこで彼らの採った方策は、四つのイエス伝を等資格において、その間の無矛盾性を追求するというのではなく、マルコを最古に置き、マタイ・ルカはその派生であり、ヨハネはそれらとは別系統としてそれら四つに違った重み付けを与え、さらにそれら四つはみな違ったイデオロギーをもつセクトの所産だとして、それぞれのゆがみをあはさだすことであつた。玄奘の場合にそうした方法が成功するかどうかはやってみなければわからぬが、試みる価値はありそうである。

ヨーロッパの聖書学者が採ったもう一つの戦術がある。それは考古学的な知見の援

用である。この戦術を著者にすすめるのは釈迦に説法というもので、著者自身それを試みておられる。しかしなお決定打というわけにはいつていないようである。

なお蛇足かも知れぬが漢文原典の読み下

し文はもっともとくだいていただきたいと思う。日本のシナ学者たるものすべては漢文引用に際し素人にも通読可能な日本文に仕立てあげるべしというルールが確立されることを望みたい。

(山下正男)

飛鳥井雅道『日本プロレタリア文学史論』

(A5版、二二六頁、八木書店)

本書はすでに発表されている七篇の論文をあらたにまとめあげたものである。政治にたいする文学の自立という考え方が定着し、さらに保革や東西といったイデオロギーによる区別が少しも意味を持たなくなつた今日、プロレタリア文学運動は特に色褪せて見える。著者はそうした雰囲気にあえて抵抗し、従来おろそかにされてきた運動自体の検討を綿密におしすすめることによって、その正確な位置づけをはかろうとしている。

本書で最も重点が置かれているプロレタリア文学運動の時期区分という問題は、この運動こそが政治と文学との最も緊張した

関係を生み出したのであるがゆえに、決して恣意的或いは教条的に処理することはできない。アナーキスト大杉栄らが創刊した「近代思想」(一九二二年)にプロレタリア文学の始まりを求める著者の主張は、党派性をふりほどけなかった旧説を超えるものとして注目されるだろう。

運動全体を四つの時期に分ける著者にとって、政治と文学という問題を考える際にポイントとなったのは、「運動の全面に立った人びとのフレキシブルな感覚」だと思われる。その感覚が十分に保たれた時、プロレタリア文学運動は発展し、逆の場合には後退を余儀なくされた。そして文学上の

後退とは、とりもなおさず政治的な混乱にほかならない。「党の指導が直接的無条件的に行われる領域がある。党が監督し協力するに止まる領域がある。党が単に協力するだけの領域がある。最後に、党が単に自己の立場を明らかにし得るだけの領域がある」(トロツキー)ことが損われた時、政治と文学との境界は消し飛んでしまい、結局は両者ともにみじめな敗北を迎えることになったのである。

ソ連の政策に追隨するしかなかった日本の運動が、社会主義リアリズムをスローガンにした一九三二年のソ連の一時的な自由化政策に対応しきれず、当時の危機的状況を打開するチャンスを失ったことにたいして、著者はかなり深くこだわっているようだ。このソ連の方向転換は、運動末期の論争や分裂、転向およびその方法に大きな影響を落としているという。プロレタリア文学運動が今日に至るまで投げかける最大の問題が、その崩壊の仕方である以上、直接的なきっかけとなった事件に何か特別な感慨があっても不思議ではない。そこから生まれたとも言える平野謙論は、運動が残した課題の大きさを痛感させる。(井波陵二)

府県統計と「政談演説」

——近代日本の政治運動班——

府県別の統計をつくるという仕事は、明治六、七年頃から多くの府県で試みられており、この頃から、一枚の大きな紙に、さまざまな数値を刷り込んだものが『県治一覧概表』などといった名称で売り出されたようである。その後、収録する項目を増やし、それを巻き紙のように横に長くつづけて折り込んでゆく方式から、さらに冊子の形にまでととのえられてくるのであるが、明治十年代前半には、百二十項目前後の統計をおさめた『何々府県統計表』が次々と発刊されるようになった。

この『統計表』は明治十五年頃からさらに『統計書』に収められるが、ここで項目は二百数十に倍増されるときともに、その内容は画一化されており、ここにはじめて「政談演説」なる項目が登場することになる。この統計の中心は「演題」と「演説」であるが、前者は、さらに「認可」「不認可」に、後者は「度数」「人員」に分けられており、政談演説会の認可制を、演題にまでふみ込んで実施していた当時の取締状況を物語っている。

この統計は、府県の「統計書」方式への切りかえ時期がばらばらであったため、全国的な集計が發展され

たのは、『日本帝国第六統計年鑑』（明治十八年分）の一年分だけであるが、個々に、あるいは地域的に検討してみても当時の政治運動について色々と考えさせてくれる貴重な資料といえる。

例えば、大阪、京都、滋賀の近畿三府県と、福井、石川、富山、新潟という北陸四府県とをくらべてみると、それぞれの地域での演説会の消長は全く対蹠的な曲線をえがいていることがわかる。まず五畿三府県の場合には、明治十三、四年をピークにして急激に下降し、明治十八、九年をどん底に漸増に転ずるというカーブであるが、その起伏の差が非常に激しい点の特徴であった。一番数字のそろう滋賀県でみると、明治十二年に五回だった演説会回数が、翌十三年には一一七回と一気にピークにのぼり、以後、七六、二一、二四、一八とおち込んで十八年には五回というありさまであった。

これに対して、北陸の場合には、近畿よりも数次的には低い水準ではあるが起伏は少く、とくに、近畿がおち込んでいる明治一七年に、福井（四二回）、富山（三四回）、新潟（一二七回）の三県とともに、明治十年代のピークが記録されているのである。

この仕事はまだ始めたばかりであるが、こうしたつみ重ねのなかから、政治運動の地域的パターンを考え手がかりでも得られないものかと、今は漠然と考えているところである。

（古屋哲夫）

金玉と木石

——石刻資料の研究・整理班——

石刻資料の研究班、ニックネームで呼べば金石班が、本年から三カ年計画で発足するにあたり、企画に加わった因縁で、梅原班長から、紹介の文を書くようにと仰せつかった。依頼を受けたとき、ちよつと金石をひねって、その場でこの題を届けしたが、別段深い意図があった訳ではない。六朝の文人顔之推が、顔氏家訓の勉学篇の中に、こんな問答を載せているのを、ふと思ひ出したからである。

「学古今を備え、才文武を兼ねるとも、身に禄位なく、妻子の飢寒する者、勝て数うべからず。安んぞ学を貴ぶに足らんや」

「夫れ命の窮達は、猶金玉木石のごときものなり。修むるに学芸を以てするは、猶磨瑩彫刻のごときものなり。金玉の磨瑩は自から其の鉱璞を美しうし、木石の段塊は、自から其の彫刻を醜しうす。安んぞ木石の彫刻、乃ち金玉の鉱璞に勝ると言うべけんや。有学の貧賤を以て、無学の富貴に比ぶるを得ざるなり」

さて、当研究所が蔵する拓本は、内藤湖南先生や桑原隲藏先生の旧蔵拓を含み、世界でも有数のコレクションの一つに数えられている。金玉にもあたるこれら

の拓本を、宝蔵ならぬ書庫から取り出して、一枚一枚眼の前に拵げて楽しんでゐるのだから、三年では何程の仕事もできぬことは先刻承知している。分野を異にする同好の研究者が集まって、あれこれ述べあううちに、ただ眼福を肥やすだけでなく、自からの関心があるところで、いくつかの発見を得ればそれで大成功なのである。未整理の拓本の山を崩していくうちに、目錄でもできればめつものだという色気も多少はある。

折りしも世間では書道ブームを呼んでおり、旅行が解禁された中国で、日本人が拓本を買ひあさるため、その高くなったこと、論議の外にある。先日北京の首都博物館に、進士題名碑つまり科挙合格者名を刻んだ碑を見に行った際、幾つかの拓がどうしても欲しくて値を聞いたところ、一枚が五〇〇元（約七万円）だという返事にびっくりし、手を出すどころか首をすくめて帰る他はなかった。新しい収集は難しくても、伝来の拓本は沢山ある。かくして研究会に動しむことと相成るが、ただわが学の金玉ならざるを恨むことしきりである。なお余談だが、金玉はキンギョクと読む。たまに間違ふ人があると困るので、お断りしておく。

（勝村哲也）

表街道の社会史をめざして

——一八四八年研究班——

この共同研究は、一八四八年のヨーロッパ各地における革命の事件史を細かく追求するよりも、この時期にヨーロッパが体験した、社会の最深部まで達するような質的変化を、さまざまな側面から検討しようとするものである。言うまでもなく、こうした視点のとり方は、近年さかんに研究されている社会史のそれと、共通するところが多い。とはいえ、この共同研究は、少なくとも日本で流行している形の社会史とはいささか違ったところにアクセントを置くことになるだろう。

まず、従来の社会史は、大塚史学を典型とする経済史が農村における生産のみを特権化してきたことへの反動として、都市における消費に関心を集中する傾向がある。むろん、それも大切ではあるけれど、消費生活の細部にのめり込むあまり興味本位の風俗史めいたものになってしまっただけの意味がない。これまで表街道一本槍だったからといって、今度はもっぱら路地裏にもぐり込むというのでは、元も子もないのである。むしろ、あくまでも生産の場における人々の結びつきを社会史的に探究することこそ、はるかに重要な課題であらう。

また、そのことと関連して、△中心と周縁▽だの△秩序と混沌▽だのという大昔にはやったナツメロが、社会史の領域で復活している例も目につく。たとえば、革命的な運動は、生産の場を足がかりとして、労働者によって展開されたのではなく、居酒屋のような周縁的な場を足がかりとして、ルンペンプロレタリアートのような周縁的な存在によって展開されたのだ、という主張がある。後者と比べると、前者は中心的な秩序の構成要素にすぎず、秩序そのものを変革する混沌とした力の担い手たりえない、というわけだ。こうした嗤うべき主張が、体制変革にあたってはルンペンプロレタリアート・狂人・女子ども・第三世界あるいは「わが内なるカオス」の叛乱を待つばかり、という極めて反動的な態度に結び付きやすいことは、言うまでもない。

こうしてみると、社会史の成果をとり入れて、家族から国家まで広汎に分散した領域を視野に収めつつ、しかも、その各々を、周縁的な路地裏としてではなく、権力と民衆、ヘゲモニーとカウンターヘゲモニーの拮抗という歴史の本筋の表舞台の一幕として、改めてとらえねばならないということになるだろう。言ってみれば、いま必要とされているのは△表街道の社会史▽なのである。

(浅田 彰)

旅

ケンブリッジ大学からの便り

礪波 護

京都から送ってもらっている新刊速報によると、『徐志摩選集』が遂に中華人民共和国でも出版されるらしい。ケンブリッジ留学中に詩作を始め、胡適らと新月社を創立し、聞一多と共に格律詩を主張して、革命文学派とも、また魯迅とも対立した徐志摩（一八九六—一九三一）の六冊本の全集や選集、彼の伝記の、いずれも台湾で印行された書物を、当地の大学図書館から借り出し、研究室で読んでいた私には、感慨一入である。

大学が揺れに揺れていた六九年の夏、唐代研究会に招待された折に六週間滞在中のこの街の魔性に魅入られ、文部省在外研究員として十四年ぶりに舞い戻ってきた私は、徐志摩のように詩作を創めようにもその才なきを恥じざるをえないが、中国学を修めたお蔭か、これまで淡い交わりを続けてきた友人の痒い所に手の届く配慮の下、ビジティング・フェローという学者貴族の特権を満喫している。

一月からのレント学期と四月からのイースター学期を

おえて長期休暇に入った今、六カ月をこす生活を振り返ると、各学期の終りの一日に見聞した行事が最も印象深い。まず三月十一日。「マギー・ゴバック」の罵声をあびせ生卵を投げつけるケンブリッジ左翼の間を、私の属するクレア・ホールの隣のコレッジの昼食会に出席すべく足早に通り返したサッチャー首相を目の辺りに見たその夜、友人がフェローをしているセント・ジョンズ・コレッジの年に二回しかないという厳肅な公式晩餐会に借りものの蝶ネクタイで出席。そのコレッジの卒業生でもある前のカンタベリー大司教コガン卿夫妻ら並居る来賓の列に交えてもらったが、五時間を越す会の進行中、短かいスピーチ一つさえなかったのには、つくづく感心した。つぎはメイ・ウィークの六月九日。サッチャー保守党の圧勝が予想された総選挙投票日と重なった名誉学位の授与式に参加。セナト・ハウスで繰広げられた一時間半にわたる儀式はすべてラテン語で行なわれ（出席者にはラテン語と英語対訳の小冊子が配付された）、一人ずつ公式演説者による業績紹介のあと、大学総長から短かい文言とともに学位を象徴する角帽が頭上に被された。私の目に映ったこの式典の主役は、大学総長のフィリップ殿下エジンバラ公でもなければ、名誉法学博士を授与された西ドイツの前首相ヘルムート・シュミットやアメリカのメロン財閥の当主ポール・メロンらでもなく、ラテン語を朗読し屢しば声色で会場の笑いを誘った公式演説者の古典学者ディグル博士であった。

当地にきて、唐代の音楽や声明、日本の雅楽や民謡を研究する学者達と昵懇になっていたので、東洋音楽をふくむ音楽学部のあることは知悉していたが、大きな儀式に際して聖歌隊の合唱を聴く機会を重ねるうちに、中世の修道院の連合体とも言えそうなこの大学に、古典学部と音楽学部が存在するのは当然だと実感するようになった。

トルコ族の移住・現代編

濱田 正美

かつては、ペルシャ湾からティグリス河をそこ迄は溯行出来たというディアル・バクルの市の余りのむし暑さに閉口し、方向を北東へと変えてマラティアへと向った。谷教授との弥次喜多道中である。マラティアでホテルへ行こうとタクシーを拾ったところ、若い運転手氏が「あんたたちパキスタンから来たんかね」と話しかけて来た。質問の余りの突飛さに面喰いつつ尋ね返すと、最近「我々のような顔をした人々」が、パキスタンからやって来て、マラティアの郊外に入植したとのこと。運転手氏の説明では聊か不得要領ではあったが、そこで思い出したのはしばらく前に読んだ新聞記事のことであった。トル

コのケナン・エヴレン大統領（当時は国家安全評議会議長）が、パキスタンを公式訪問した際、アフガニスタンからのトルコ系亡命者たちの窮状を知り、これら「中央アジアの兄弟たち」をトルコに引き取ることを約束した。この約束はやがて果され、件の亡命者たちはトルコ航空の特別機でパキスタンからトルコに運ばれ、アナトリア東部の数個所に入植したというのが、その記事の大略であった。マラティア郊外にもウズベクの一グループが入植したらしい。運転手氏は我々のアジア的風貌故に、我々を「中央アジアの兄弟」だと思い込んだのであるらしかった。

我々が直接体験したことは、これだけである。だが、この現代の民族移動について、もうひとつことつけ加えておこう。

パキスタンからトルコへ運ばれた人々のうち、最も興味深いのは、キルギス族の一集団である。アフガン紛争が始まるまで彼らは、アフガニスタン領の小パミールで遊牧生活を送っていた。パミールで彼らを調査したフランスのレミ・ドール氏に依ると、彼らは元来ソ連領にいたのだが、一九三〇年代の同化政策に反発して、中国領へと移住、新疆解放後アフガニスタン領へ移っていたものらしい。アフガン紛争後一旦はパキスタンへ出て来たものの、しばらくしてソ連領へ戻り（驚くべき話だが）、そこにも失望して再度パキスタンへ亡命したのだという。彼らの族長ムスルマン・クリ・ハンはアメリカ

大統領に親書を送り、軍用輸送機で彼らを畜群もろともアラスカへ運んで呉れるよう頼んだが（何故なら彼らは氷雪の環境での遊牧に慣れているから）、返事を得られず、最終的にトルコに定住することになったという話を聞いた。彼らは「兄弟たち」の移動に遅れること数世紀にして、アナトリアへ到着したのであった。

移動民のパン焼き技法

谷 泰

乾ききった草一つない石ころだらけの大地は、地平線の彼方でもえ立つ蜃気楼の底へと、まっすぐにもぐり込み、まるで大地が燃えているかにもえた。そして私といえば容赦なく射すように暑い白昼の太陽光の到来を無関心に許している、憎くなるような極透明の大气のもとで、暑さに耐えかね、身をおきかねていた。しかし近くには木陰はおろか、この暑さを避ける遮蔽物は一つだになかった。

羊に水をのませるために、牧夫はこんなところを時間をかけて歩いて来たのだ。彼らの肌は、身体はいつたいどうなっているのだ。いやおまけに、ついさっき近くにしゃがんだ男は、その焼けた地面を少し両手で掘りおこ

し、そのくぼ地で火をもし始めているではないか。炎天白昼の下でもえる焔に、ある種冷酷な虚無感を感じるのには、葬儀の終りに茶碗が割られ、紙がもやされる時の空しい焔の経験のゆえかだろうか。ともかく炎天下でのその白々しい焔は、まさにいまいましさとやりきれなさを倍加させるのに十分だった。

いまさらこんな所で、暑い茶でもあるまい。冷たいカナートの水をくんできたばかりなのに。ただ薪火をしているパシュトゥの牧夫は、そんな気持などにおよそ係わりのない無表情さで、また袋の中から燃料をつまみ出しては、その火の上にはらまいた。燃料といって、一木一草もないこの砂漠には材料になるようなものはない。それは、刈り跡放牧地でかき集めたのだろう、灌木の小枝や禾本科の茎と乾ききった羊糞とのまじりあった携帯燃料であった。

いったいなにをするのか。こんなことを思っている時、もう一人の牧夫が、厚さ二センチ余のまるい平たいかためにねった麦粉のパンだねをもつてきて、その火の上においた。そして薪火の周囲の砂まじりのおき火を上にかけた。まさにパンのむしやきのいかにも原始的なやり口である。三〇分ほどしてはり出すと、表面が炭化した、黒いなんとも云えぬパンがそこにはあった。

旅の記録と云って、昨年はアフガニスタンには行っていない。一九七七年予備調査の際、副隊長の阪本寧男氏（京大、生殖質研究施設助教授、栽培植物起源学専攻）

と、カーブル南方五〇キロ余のある村はずれで牧民に会ったときの経験である。鉄板や陶製の円板を火にかけ、その上にうすくのばしたパンだねをのせてやく、ノンやチャパティをつくる手法は、これまで何度もみたことがある。このパン焼き板をロバの背につり下げて移動する牧民をみて、いかにも携帯便利なパン焼き道具だ、と思ったことがある。しかしここで見たパン焼きには、道具らしいものは一つだに使われてない。もちろん手法としてオセアニアなどの、土中でのイモのむし焼き法に似たものではあるのだから、とくにおどろくものではないが、パンのためのねり物をちかに火におくと、灰ややけた炭火がついて、決してきれいなものではない。おまけにたべてもなまやけで決しておいしいものではなかった。ただし一種オーヴン式上下焼きのパン焼き技法の、移動民に適したもっともプリミティヴなものだと思ったのを記憶している。

ところで、移動民に適したオーヴン式パン焼きのもう一つの形式を一九八〇年と八二年ギリシャで牧民調査をしたときにみた。一九八〇年は、野村雅一氏とイピロス地方のサラカッチャニという牧民的民族集団の夏営地でのことだった。また一九八二年には、テッサリア・トゥリカラ地方の牧民部落でのことだった。なにもそのパン焼き技法が牧民的なものだと云うのではない。すこし説明すると、そのパン焼きに用いるオーヴンは上下二つからなっていて、ガストウラといった。下部はちょうどケ



ギリシャ北部に分布する携帯用オーヴン式パン焼き

ーキなどをオーヴンで焼くときの深さ五〜六センチの金属製の深皿のかたちをしている。もちろん直径は四〇センチはあるだろうか。上部は球を上で浅く切ったようなフタで、頂点に持ち手がついている。ただ、単なるフタと違うのは、その円い縁にそって、三〜四センチの高さのふちどりの罫がしてあって、そこに炭火がおけるようになっていいる。薪火を用意し、その上にパンだねを入れた深皿をおく。そして予め赤く熱しておいた上フタをかぶせ、その上に炭火をおいて、上下両面から焼く。とくにパンを焼くためだけでなく、じゃがいもや他の野菜を油でグリルするためにも用いることも多いが、パン焼きかまどのない定着農村の家庭でも、暖炉の火の上にかけて料理に使っていた。ましてや定置のパン焼きかまどに頼ってはおれない移動する牧民にとって、このガストゥラは必需品であった。はたして陶製の携帯オーヴンというものが、かつてあったのかどうかは知らない。ただ鉄板などの上で裏がえしながら、上下両面を焼くホットケーキ系統のノンと違って、上下からむし焼きにする技法が、中近東から西欧にかけて分布しながら、その典型としてパン焼きかまどをしか考えてなかった私には、このような移動民にも使える携帯用オーヴンとの出合いは、興味深かった。パンの両面焼きの技法の原初形態がはたして、アフガニスタンでみたような手法であったのかどうか、そこらは知らない。ただ移動民にも、このオーヴン系統のパン焼き技法がちゃんとあるということは、こ

れまで知らなかっただけに、私には記憶に残る一つの事柄であった。

調査の報告でなく、旅の印象の余滴だが、いちおう記録しておく気になって、筆をとった。

通 訳

平 田 昌 司

団体の通訳で中国へ行った。五月九日から二十二日まで北京、西安、武漢、上海をおとずれ、各研究機関の学者たちと日本側との分科討論がもたれた。通訳にあたったのは主として企業管理、なかでも目下の経済調整分野である。

はたして理解しえているかどうかかわからないことをを訳さねばならないのはほんとうにつらい。べつだん専門語彙が貧しいというようなことではない。もっとどうにもならぬことなのだ。通訳しはじめてみて自分でもおどろいたことに、一時を糊塗するため然るべく創作した訳をつけたという誘惑はじつにはげしいものである。そうしてしまったことは何回もある。ために議論がそこで途切れてしまったこともある。もちろん、一度ごまかすと、前とのつじつまをあわせるためにうそを重ねなくて

はならなかった。

体制のちがいというのはこのような場合じつに便利なものである。たとえば「企業の主権拡大と資本主義化とは等質なのではないか」なる問いへの中国側による答えがいかに隔靴搔痒のものであろうとも、発想の違いでかたがついてしまう。通訳の質に疑いがおよぶことは比較的少ない。

しかしながら、あらわに疑われなくとも、無意識のうちに対話者たちの態度に枷をはめてしまうという形で質への評価はあらわれてくる。日本側からは『人民日報』を読めばいくらでも書いてある事からについて質問が続き、中国側からは新聞そのままの答えが引きだされてきた。訳しながら、そのときは笑止に思った。だが、実は

たずねたいことの伝わらなさゆえに、他の問いを自然と回避してしまわなくてはならなかったにすぎないのではないか。仲介者による情報の壟断が可能なとき、議論は沈滞する。

してみれば、よほど有能で信頼された通訳にとつては、ことを僅かずつ歪めて伝え、自分の好ましい方向へと最後の結論を導くこと、ないしは対話者同士の感情の齟齬をきたさせることすらたやすいはずである。いちど実験してみてもどうだろう。

わたくしは残念ながらそれほどの技倆もなく、第一正直だからこうした試みはしていない。同様の結果をまねいた覚えはある。それはただわたくしの中国語がヘタだったゆえにすぎない。

計 報

○梅原末治名誉教授は一九八三年二月一九日逝去された。

○招へい外国人学者方紀生氏は六月八日逝去された。

外国人研究員

○Jane Cobbi フランス国立科学センター研究員

贈与を通じてみた社会関係

受入教官 谷 教授

期間 一九八三年四月～同年八月

招へい外国人学者

○曹 永 禄 東国大学校文理大史学科副教授

中国明代史

受入教官 小野助教授

期間 一九八三年一月～同年六月

○Marc Kalinowski フランス極東学院研究員

陰陽五行説研究

受入教官 山田教授
期間 一九八三年一月～同年三月

東洋学文献センター講習会

○一九八三年度 第二二回漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（五月一六日）

漢籍の分類について（講義）

尾崎雄二郎

漢籍の整理について（講義）

井波 陵一

第二日（五月一七日）

経部書（講義）

平田 昌司

実習

第三日（五月一八日）

史・子部書（講義）

浅原 達郎

実習

第四日（五月一九日）

集・叢書（講義）

（文学部助手） 釜谷 武志

実習

第五日（五月二〇日）

漢籍について（講義）

（文学部助手） 日原 利国

情報交換・質疑応答

おくりもの

○一九八三年度の財団法人人文科学研究協会助成金は、上山所長の推薦により山崎一氏におくられた。

山崎一氏の群馬県古城塁址の研究

最近、日本史の分野で、中世の再検討が活況を呈しているが、そうした動きのなかで、これまで、中世史研究者の視野の外にあった城郭史研究が、注目をあびるようになってきた。

城郭史研究の対象としては、石垣と白亜の天守閣をもつ近世城郭が、建築史の対象として、まず学問的研究の領域に加えられ、次いで、古代律令国家のもとにおける巨大な石塁をともなう山城が、主として考古学的研究対象として取り上げられたのであるが、全国各地に無数に分布する中世城郭の研究は、ながいあいだ、郷土史家や好事家たちにゆだねられたままになってきた。

ところが、最近になって、奈良女子大学の村田修三氏、国立歴史民俗博物館の今谷明氏などの中世史専門家が、従来の中世城郭史研究の成果を、本格的に導入する方向を示すようになってきた。

こうした状況のもとで、従来の中世城郭史研究の成果をふりかえってみるとき、最も注目すべき成果の一つとして衆目の一致するのが、山崎一氏の『群馬県古城塁址の研究』（全四巻昭和五三年～五十四年）である。

この本では、群馬県下の古城塁址六八九がとり上げられ、そのすべてについて正確な平面図がつくられ、踏査記録、戦史、関係古文書等が可能なかぎり載録されている。

る。

この本は、一つの県に視野を限定しているが、その範囲内で、可能なかぎり遺跡を網羅し、各々の遺跡について、可能なかぎり正確な客観的データを提供している点で、今後の地域的研究のモデルとして役立ちうるのではないかと思う。

(上山記)

お客さま

○二月一六日

オーストラリア国

グリフィス大学現代アジア研究所主任教授

Prof. Colin Mackerras

○三月二二日

第二回日中文化交流政府間協議中国側代表団の左記メンバーは協議後文献センターを表敬訪問された。

文化部対外文化連絡局アジア処副処長 馮 柏 泉

教育部外事局副局長

〃 〃 官員

中国科学院外事局副局長

中国社会科学院外事局アジア・アフリカ処処長

体育運動委員会国際局秘書処処長

○三月二五日

中国黒竜江省社会科学院訪日団

黒竜江省社会科学院長

〃 〃 歴史研究所々長 劉 民 声

〇四月一日

北京大学外事処処長

〃 幹部

〇四月六日

図書館情報大学客員教授 Ronald O. Linden

〇四月一三日

中国社会科学院との科学者交流についての座談会 於本館大会議室

〃 〃 近代史研究所研究員 榮 孟 源

〃 〃 副研究員 章 伯 鋒

〃 〃 所員 李 秀 石

〇五月九日

中央民族学院民族研究所講師

〃 〃 索 文 清

香港中文大学新亞書院人類学系 王 崧 興

〇五月一三日

中国社会科学院外事局次長

〃 〃 王 平

〇五月一六日 中国社会科学院訪日代表团 於 分館

中国社会科学院院長 馬 培 洪

〃 〃 弁公室主任 向 培 祖

〃 〃 法学研究所副所長 盛 家 其

政治研究所所長 嚴 家 其

工業経済研究所副研究員

〃 李 泊 溪

〃 吳 凱 泰

〃 外事局アジア・アフリカ処副処長

〃 彭 晋 璋

〃 日本研究所（通訳）

周 斌

人のういき

○田中峰雄助手（西洋部）は辞任の上、甲南大学講師に転出。

○松井 健助手（西洋部）は辞任の上、神戸学院教養部助教授に転出。（以上3月31日付）。

○藤井譲治（神戸大学文学部助教授）を当研究所助教授（日本部）に配置換。

○Kornicki, Peter Francis（外国人研究員）を助教授（日本部）に採用。

○甚野尚志氏を助手（西洋部）に採用。（以上四月一日付）。

○宮崎法子助手（東方部）は、一〇月二日成田発、北京故宮博物院、上海博物館等で中国絵画の調査及び資料収集を終え、同月一六日帰国。

○吉川忠夫、麦谷邦夫、狭間直樹助教授（東方部）は、日本道教遺跡訪中国団の一員として、一〇月二四日伊丹発、中国社会科学院世界宗教研究所、廬山・蘇州等

で道教関係遺跡に関する研究及び調査を終え、十一月

一日帰国。

○桑山正進助教授（東方部）は、十一月二日成田発、ニューヨーク国立博物館、マトウラー博物館、李鄭屋村漢墓等で考古資料の収集を終え、十一月二四日帰国。

○横山俊夫助教授（日本部）は、昭和五八年一月四日伊丹発、オックスフォード大学でヴィクトリア後期イギリスにおける日本像の研究ならびに資料調査を終え、同月二九日帰国。

○礪波 護助教授（東方部）は、文部省在外研究員として一月一六日成田発、ケンブリッジ大学、ハンブルグ大学、ウィーン大学、ローマ大学、ハーバード大学等で中国社会史の研究をし、十一月一五日帰国予定。

○勝村哲也助教授（東方部）は、二月一九日成田発、北京大学、中国仏教協会等で中国仏教史跡並びに漢籍の計算機処理に関する打合せを終え、二月二二日帰国。

○吉田光邦教授（日本部）は、三月一九日成田発、阿姆斯特ダム王立美術館、ドレスデン美術館、ギメ美術館等で中国陶器及び日本陶器の海外流出調査を終え、同月三一日帰国。

○林 已奈夫教授、平田昌司助手（東方部）は、五月九日伊丹発、中国社会科学院、陝西省社会科学院、河南省博物館等で、中国における社会科学の学術研究の事情調査を終え、同月二二日帰国。

○竹内 實教授（東方部）は、五月二八日伊丹発、上海師範学院、西北大学、社会科学院文学研究所、洛陽市

周辺文化財遺跡視察を終え、六月五日帰国。

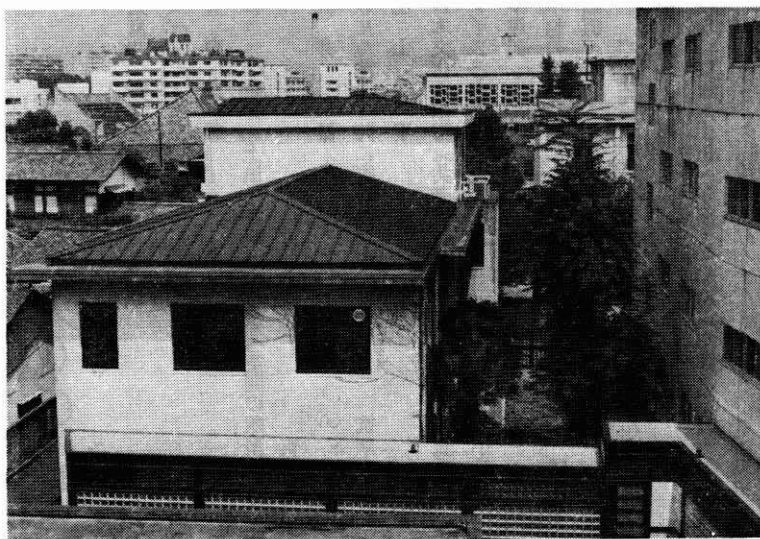
西館について

今回日独会館跡建物を人文科学研究所が使用することになり、そのために改修工事がとりおこなわれた。この建物は投票の結果、西館と命名され、本年九月から共同研究会議室、資料収蔵室、書庫等として利用される予定。なお西館は二階建て（一部三階）で、延坪数約五〇〇平方米である。なお掲載の写真二葉は熊本健氏の撮影になるものである。

（山下記）



北側から見た西館



南側（イタリア会館）から俯瞰した西館

書いたもの一覧

一九八二年二月～一九八三年五月
(五十音順、●印は単行本)

●浅田 彰

討議・ドゥルーズ『ガタリを読む(今村仁司と)

現代思想 一二月

逃走する文明

ブルータス 一月一・一五日

不幸な道化としての近代人の肖像

現代思想 二月

マルクス主義とディコンストラクション

読書新聞 二月二二日

討議・マルクス・貨幣・言語(岩井克人・柄谷行人と)

現代思想 三月

差異化のパラノイア

広告批評 三月

討議・経済幻論(栗本慎一郎・三浦雅士と)

Harvester 九号 三月

書評・山本哲士『消費のメタファー』

朝日ジャーナル 三月一八日

知の最前線

ブック・ガイド・ブック・1983

モースからニーチェへ

現代思想 四月

スキゾ・カルチャーの到来

月刊ペン 四月

ぼくたちのマルクス

中央公論 五月

アルチュセール派イデオロギー論の再検討

思想 五月

●飛鳥井 雅道

文学のことば

文学 四月

●天野 史郎

ガラスの世界(上田・多田・中岡編『空間の原型』)

筑摩書房 三月

●荒井 健

●秋風鬼雨——詩に呪われた詩人たち

筑摩書房 一二月

●上山 春平

●日本文化の系譜(共著)

徳間書房 一二月

●アイヌと古代日本(共著)

小学館 一二月

●宇佐美 斉

中也の未刊詩篇について

国文学 四月

翻訳・イヴ・マリリアリュー・

UN SPECTACLE AMUSANT

ふらんす 四月～五月

●梅原 郁

文字の建築(上田・多田・中岡編『空間の原型』)

筑摩書房 三月

●東京夢華録 訳注(入矢義高と共訳)

岩波書店 三月



●小野和子

●明清時代の政治と社会(編)

人文科学研究所 三月

東林党と張居正(同右所収)

三月

東林党考(一)——その形成過程をめぐって——

東方学報 五五冊 三月

中国女性史を考える 静岡女子大学婦人教育研究報告3 三月

●川勝義雄

●六朝貴族制社会の研究

岩波書店 一二月

翻訳・M・カルタンマルク「太上靈宝五符序に関する若干の考察」

東方学 六五輯 一月

●久保由美

浮世草子の語法と文体

人文学報 五四号 二月

●桑山正進

インドへの道——玄奘とプラバーカラミトラ——

東方学報 五五冊 三月

麗寶と仏鉢

展望——アジアの考古学

新潮社 三月

Kapisi and Gandhara according to Chinese Buddhist Sources

Oriental, Vol. XVIII, 1982 四月

バーミヤーン大仏の出現

同朋 五八号 四月

●ジッター・コニッキ

●The Reform of Fiction in Meiji Japan (Oxford Oriental Monographs 3)

Ithaca Press, London, 1982.

The Enmei in Affair of 1803 *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 42 No. 2, December 1982.

西洋に於ける貸本屋と読者についての参考文献

貸本文化 一〇号 一二月

●佐々木 克

●古文書用語辞典(共編者)

柏書房 五月

●杉山正明

ふたつのチャガタイ家(明清時代の政治と社会)

人文科学研究所 三月

●竹内 実

「新晩報」

中国の大学を見学して

党規約と憲法

江青未亡人の減刑

弁解的弁解

漢字の生命力

ハイジャックの「犯人」たち

●多田道太郎

四季つれづれ(三二—五〇)

失郷者のノスタルジー

美意識 上・下

動く日本地図

小田仁二郎『触手』

「語らう」の美学

●空間の原型(共編著)

体質

神戸新聞 一二月二一日

毎日新聞 一二月二七日

神戸新聞 一二月二五日

京都新聞 二月二四日

読書 三月

京都新聞 四月六日

京都新聞 五月二五日

産経新聞 一二月—四月

朝日新聞 一月

西日本新聞・中日新聞 一月

京都新聞 一月

日本小説をよむ会会報 二月

青年心理 三月

筑摩書房 三月

読売新聞 三月

かしわ手

健康づくり 四月

指紋

健康づくり 五月

●田中 淡

中国住宅の類型『日本民族文化の源流の比較シンポジウム・Ⅳ・すまい』 国立民族学博物館 一二月

●科学史技術史辞典(营造法式、園治ほか項目担当)

方位―生と死の原理(上田・多田・中岡編『空間の原型』) 弘文堂 二月

十字路に立つ報時楼閣―中国の鐘楼・鼓楼 筑摩書房 三月

チャイム銀座 五月

●谷 泰

コメント、太田至論文「移牧民による家畜放牧の成立機構」 季刊人類学 一三卷四号 一二月

小論・隠喩としてのマリア 季刊人類学 一四卷一号 三月

かくされた聖数(上田・多田・中岡編『空間の原型』) 筑摩書房 三月

●角山 栄

ダンスと糸紡ぎ棒 アニマ 一二二号 四月

●ロンドンの素顔・都市の素顔―時間・闇・芸術 (小池滋、栗本慎一郎氏と対談) Harvester 8 一二月

●医の倫理について考える 和歌山県医師会 一二月

書評・香内三郎著『活字文化の誕生』

日本読書新聞 一二月二七日

シンデレラの時計

月刊百科 二四三号 一月

時計の社会史への試み

読売新聞 一月二二日

和歌山文化について(神坂次郎・村橋正武・有馬幸一氏との座談会) 二一世紀わかやま 三号 三月

和歌山の活性化のために 二一世紀わかやま 三号 三月

書評・安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』 朝日ジャーナル 四月一日

産業革命と民衆生活 教室の窓・東書・中学社会 四月

なぜ、紅茶を受け皿で 遠やまびこ 三号 四月

Socio Economic History Society Information Bulletin of The Union of National Economic Associations in Japan

日本経済学会連合 四月

経済大国・日本のルーツ―領事が市場情報収集― 朝日新聞 五月一七日

日本経済学会連合

読売新聞夕刊 一月八日

●礪波 護

西の文化の現在・東洋学

富谷 至

史書攷

秦漢の労役刑

秦漢における庶人と士伍・賞書

『中国士大夫階級と地域社会との関係について』の総合的研究

回顧と展望

史学雑誌 九二編五号 五月

●羽賀 祥二

東北各県の中小教院と仏教

仏教史学研究 二五卷一号 一二月

江藤新平の反キリスト人教神学 さろん日本文化 九号 四月

●狭間 直樹

義気の集団Ⅱ会党——中国近代の秘密結社 月刊百科 一二月

序『日本新聞五四報道資料集成』 人文科学研究所 二月

五四運動史研究についての往復書簡

近きに在りて 三号 三月

孫文と周辺の研究書も多彩——現代中国における辛亥革命

命研究(七) 東亜 一九〇号 四月

●浜田 正美

十九世紀ウィグル歴史文献序説 東方学報 五五冊 三月

肅州城東関婦華寺『明清時代の政治と社会』

人文科学研究所 三月

●林 巳奈夫

「殷—春秋前期金文の書式と常用語句の時代的変遷」

東方学報 五五冊 三月

●平田 昌司

「小称」与変調 Computational Analyses of Asian & African Languages 21 二月

●藤井 讓治

徳川政権成立期の京都所司代

『政治経済の史的研究』 巖南堂書店 四月

●宮崎 法子

作品解説 『中国の花鳥画と日本』

花鳥の美シリーズ10 学習研究社 四月

●麥谷 邦夫

●翻譯：老子・列子 学習研究社 三月

●村田 裕子

蕭紅「呼蘭河伝」——不幸な人びとの系譜——

神戸大学中文研究会・未名 三号 一月

●ひとびとの墓碑銘——文革犠牲者の追悼と中国文芸界の

ある状況——(共著訳) 霞山会 二月

東京における蕭紅とその作品 東方学報 五五冊 三日

●森 時彦

歴史学・近現代史(中国研究所編『新中国年鑑』

一九八三年版) 五月

●柳田 聖山

今月のことば 花園 一二月・五月

禅語コーナー 花園 一二月・五月

「花さまざま」の頃、梅原さんと無文老師 梅原猛著作集月報 一五 一二月

「慈恩大師御影聚英」の刊行に寄せて 中外日報六日号 一二月

●夢窓国師語録(禅の古典4) 講談社 一月

禅の世界・私の心配 清泉 九号 一月

禅仏教を行く——その四—— 禅文化 一〇七号 一月

悟りと笑い——白隠芸術の場合

ナーム 一月

秋山寛治さんと「沙門白隠」のこと（沙門白隠序）

二月

生と死と・永遠のドラマ

国文学 三月号

三月

京都の庭・夢窓・一休（お茶の水図書館編「教養の集い
四十四話」第3集）

三月

花は無心にして——禅語の春

清泉 一〇号

四月

一休宗純の著作物の発行所

週刊日本医事新報9日号

四月

山下 正男

古代・中世の記号論

理想 一月

天国と地獄（上田・多田・中国編「空間の原型」）

筑摩書房

三月

●編・西田幾多郎全蔵書目録

人文科学研究所

三月

記号学の二つの形態——数学的構造と論理的構造

北斗出版

四月

●山田 慶児

弘文堂

三月

●科学史技術史事典（共編）

山本 有造

三月

●山本 有造

人文学報

五四号

万延二分金考——幕末・維新期の基準貨幣——

人文学報

五四号

●横山 俊夫

節用集と日本文明

二月

●節用集と日本文明

谷口国際シンポジウム文明学部門第

二月

一回報告資料『近代における日本文明』国立民族学博

物館

二月

●吉川 忠夫

後漢末における荊州の學術 総合研究「中国士大夫階級
と地域社会との関係についての総合的研究」報告書

三月

●吉田 光邦

人文・社会科学の振興

三月

●Compact Culture

変貌する科学技術と日本人

三月

●関西の建築文化（座談）

身についた技術の復権

三月

●広場の意味

技術と人

三月

●グラフィケーション年表（監修）

耽書さまさま

三月

●いま歴史への旅

技術史の一断面

三月

●やまとの文庫

三省堂ぶつくれつと

三月

●天理時報

一〇五月

人

文

第二八号

昭和五十八年九月二十四日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷

非売品